「地域学総説」の挑戦

柳原邦光*

The Challenges of Teaching the Theory of Regional Science

YANAGIHARA Kunimitsu

キーワード：地域，地域学，地域づくり，文化的個性，生の充実，地域の文脈，経済的合理性と地域政策，再生，創造都市
Key Words: region, regional science, community development in a region, cultural character of a region, a satisfying life, regional context, economic rationalization and regional policy, regeneration, creative city

はじめに

「地域学」という言葉を聞いたとき，ほとんどの人が「何それ？」と思うのではないだろうか。「地域」という言葉も，確かに近年よく耳にするようになったが，それが何を指しているのか，改めて考えてみると，うまく説明できない。しかし，新しい言葉が生まれる，あるいは新たに使われるようになるのは，社会がそれを必要としているからであろう。鳥取大学が「教育学部」から「教育地域科学部」に，そして「地域学部」へと改組したのも，こうした社会の要請に応えようとしてのことである。地域学部は本年度（2006 年度）で創設３年目を迎え，学部をあげて様々な活動に積極的に取り組んでいる。

ところが，３年生によれば，アルバイト先で困ることが多いという。「どこの学部？」と聞かれて，「地域学部です」と答えても，怪訝な顔をされてしまう。わかってもらえるよう話すべきだが，うまく説明できない，というのである。本来，新しい学問が社会で認知されるには長い時間を要するものである（実際には，既存の学問も，十分理解されているとはかぎらない。たとえば，「文学部」はよく知られているが，何をするところかトータルに説明するとなると，容易ではない）。それでも，「地域学」や「地域学部」が何か，説明できないのは，学生にとって辛いことである。

説明できない原因と責任のかなりの部分は地域学部にあるといわねばならない。もちろん，学部

---

* 鳥取大学地域学部地域文化学科助教授

[1] 地域学部は「地域」と「地域学」について定義している。たとえば，「地域」の定義は，「人々が生活している空間のひろがりと，その広がりの中で展開されている社会関係」である。詳しくは，鳥取大学地域学部ホームページ「『地域』と『地域学』」（http://www.rs.tottori-u.ac.jp/index.cgi?osirase=tiikigaku.html）を参照。

では，「なぜいま地域なのか」，「地域とは何か」，「地域学は何を目指しているのか」について，具体的に考え，学術的な理解にまで到達できるよう授業を段階的に配置している[1]。１年で「地域学入門」を，３年で「地域学総説」を学年必修科目として開設し，２年生では，ほとんどの学科で「地域調査実習」を学科必修科目としている[2]。つまり，１年で，実際に地域活動をしている人たちの話に耳を傾け，地域の現状と地域への取組みを具体的に知る。２年では自分でも実際に地域に入って調べてみる。このような理解と経験を積み重ねた上で，３年生で高度な研究成果に触れ，そのエッセンスを吸収して，「地域学」を理論的にわがものとする，というわけである。

本年度は，この過程の最終段階，総仕上げともいうべき「地域学総説」のスタートの年であった。先述した学生の話は，授業の冒頭に飛び出したもので，「地域学総説」は，学生達が一般の人たちにきちんと説明できるようする，さらに，「地域学部生」としてのアイデンティを確立するという，きわめて実践的な課題を背負ってスタートしたのである。本稿は，この切実な課題をクリアーすべく奮闘した教員と学生たちの記録であり，獲得した成果の報告と自己評価である。

以下では，まず，第１章から第３章で授業内容を詳しく紹介し，第４章以降で授業評価を試みる。お急ぎの方は，第４章からお読みいただきたい。なお，各章のタイトルは次の通りである。「１．授業プランの作成と授業形式」，「２．第１部基調報告」，「３．第１部パネルディスカッション」，「４．第１部のまとめ」，「５．学生による授業評価」，「おわりに」。

１．授業プランの作成と授業形式

授業を準備するにあたって，筆者を含む世話教員３名で授業計画のあらましを作成した。全体は２部構成で，第１部が４名の教員の基調報告とパネルディスカッション，第２部が４学科の学生による地域調査実習報告とパネルディスカッションである。学生には，各部終了後，教員の設定したテーマについてレポートを書くことを求めた[3]。

授業全体をふたつの大きなパネルディスカッションの形にしたのは，ひとつには，専門を異にする複数の教員の報告と議論を通して，さまざまな地域理解とアプローチの仕方を知り，「地域」と「地域学」について一定の理解をえること，それと同時に，それらをすでにできあがったもの，固定したものと考えないようにしてほしい，と考えたからである。また，「地域」と「地域学」について自ら考え議論する場を学生たちに提供したかったからでもある。第２部を学生主体の形にしたのは，２年次の地域調査を報告･議論することで，調査を批判的に捉え直してほしかったからである。

このような形式をとるには，少なからず困難があった。たとえば，授業（前期）を通して，少なくとも８名の教員が出席し続けなければならなかった[4]。また，４学科の学生たちがそれぞれの学科で学んできた内容はかなり異なるもので，そのような学生たちに基調報告とパネルディスカッ

---

[2] 地域環境学科では，教育地域科学部の地域科学課程以来（2001 年度以降），毎年地域調査を行って報告書を作成し，知的財産の蓄積につとめている。

[3]〔資料１〕授業日程を参照。

[4] 基調報告者は以下の通り（括弧内は所属学科）。吉村伸夫教授（地域文化），藤井正教授（地域政策），光多長温教授（地域政策），野田邦弘教授（地域文化）。パネリストは，渡部昭男教授（地域教育），松本健治教授（地域環境），家中茂助教授（地域政策）。第１回と２回パネルディスカッションの司会と授業全体の進行役は柳原邦光助教授（地域文化），第３回パネルディスカッションについては家中助教授。世話教員は，藤井教授，家中助教授，そして柳原である。

ションをきちんと理解してもらうには，何がしかの工夫が必要だった。壇上での教員の議論が学生達にとってはるか頭上で展開される「空中戦」になることだけは，なんとしても避けたかった。こうした意識が共有されていたのか，幸いなことに，事前の細かな授業プランの作成段階から基調報告者の参加をえることができた。授業が始まってからは，他のパネリストや関係者も加わった。「地域学総説」は水曜日の５時間目で，それが終わってから研究室に集まって，授業を振り返り，次回の授業やパネルディスカッションについて検討を重ねたのである。多忙ななか負担は大きかったが，素晴らしい体験であった。専門のまったく異なる教員が意見をぶつけ合うことで，それまで知らなかった知見や発想に出合うことができたのである。

周到な用意をした上で授業に入ったつもりであったが，実際に始めてみると，不十分な点があることがわかった。それでいくつか工夫した。ひとつは基調報告の内容がかなり高度だったため，学生に十分に伝わっているか，不安があった[5]。それで，学生の理解の手助けになるように，報告の１，２日後に，報告者自身の作成した「概要」と筆者による「授業理解」とを A3 用紙１枚にして配布し，授業までに読んでおけるようにした[6]。次に，授業の最後の５分間に「感想と意見」を書いてもらうことにした。学生が授業をどのように受け止めたのか知りたかったのと，彼らに「発言」の機会を与えたかったからである。教員は授業終了後すぐに「感想と意見」に目を通して議論した。このおかげで，学生の理解の程度，考え方の成熟ぶりがよくわかった。

パネルディスカッションの進め方はなかなか決定できず，幾度も話し合いを重ねた。なんとか作成したものの，実際にはパネルディスカッションの都度，状況を見て変更した[7]。

第１回目のディスカッションは，これまでの授業の補足として，基調報告者による「補足説明」と「学生の質問への回答」を中心にすえた。補足説明の際，光多教授がパソコンを使って動画で日本の国土構造（経済的な地域構造）の変化を説明したが，難しい議論が続いて学生の集中力が切れかかっていたところだったので，とても効果的だった[8]。最後に，学生に次回のテーマを予告し，それに関する質問・意見を書いてもらった。

２回目は，「学生の質問・意見」に現れた主要な論点について，パネリストが回答した。続いて，少し趣向を変えて，野田教授が「漫画を使ったまちの活性化」について 10 分間のヴィジュアルな講義を行い，その後，司会がパネリストへ共通質問を行って議論した。共通質問は，「なぜ地域という視点から考えるのか。地域という視点を設定すると，何が見えるようになるのか」である。最後に「質問と意見」を書いてもらった。

３回目は，「学生の質問・意見」からいくつかピックアップし，質問の趣旨を学生本人に説明してもらい，それに教員が回答し議論することから始めた。次に，光多教授が「観光と地域づくり」について実例を提示して，短い講義を行い，続いて「観光と地域づくり－長浜スクエアの評価－」をテーマにパネリストが討論した。さらに，論点１「なぜ『地域』なのか」，論点２「なぜ『地域学』なのか」について討論した。最後に「感想」を書いてもらって，第１部のパネルディスカッションはすべて終了した。

---

[5] どの程度ノートがとれているか注意してみたところ，ほとんどの学生がペンを置いたままであった。
[6]〔資料２〕「基調報告の概要（『授業理解』）」を参照。
[7]〔資料３〕「パネルディスカッションの進め方」を参照。
[8] いくつかの指標から作成された日本の国土構造の地図とその経年的変化がヴィジュアルに提示された。国土構造の変化の激しさ，速さには，誰もが息を呑んだ。

パネルディスカッションの方法上の特色は２つある。ひとつは，「学生の質問・意見」に基づいて議論したこと。その際，「質問・意見」と回答をともに文章にして印刷し，あらかじめ学生に配布したことである。この結果，学生の視点に近いところで議論できた。また，授業時間枠をこえて，かなりの情報量を伝えることもできた。２つめは，「地域学」にとって本質的ともいうべき問題を，具体例にとどまらず，抽象的なレヴェルでも議論できたことである。その内容については，次章以下で述べることとする。

第２部は学生による地域調査実習報告で，地域環境学科，地域政策学科，地域文化学科，地域教育学科の順に授業３回分を用意した。報告内容については，世話教員があらかじめ条件を課した。「調査の目的」，「調査の方法」，「結論」，「自己評価」，「調査から得たもの」を盛り込むことである。報告はどれも興味深かった。先の条件を満たしたものは少なかったが，それでも，学生たちは，第１部で学んだあとだけに，調査の足りない点を自覚できたようである。思いがけない成果もあった。学生たちは他学科の学生たちが調査したことや考えていることを初めて具体的に知って，とても刺激になったという。「こんなことを考える学生もいるのか」という驚きが「感想」に語られてもいた。

学生のパネルディスカッションは，準備段階から一切を学生だけで行った。司会は壇上とフロアとの間のコミュニケーションに苦労したようであるが，なかなか鋭い指摘もあった。たとえば，「地域学」は学際的な学問であるというが，実際には，地域学部は各学科の独立性が高い。カリキュラムもそれほど学際的でも総合的でもない。地域調査実習にしても，すべて学科単位でなされている。学科横断的な授業がもっとあっていいのではないか。地域調査実習も同様で，そのような実習を通して，学部の求める地域学を実践的に経験することになるのではないか，といった指摘である[9]。このときは地域学部長をはじめ多くの教員がフロアで聴いていたが，学生たちの的確な指摘と議論に，誰もが感心した。世話教員も学生たちの知的成熟をはっきり感じとることができた。

２．第１部基調報告[10]

われわれ教員がとくに力を注いだのは第１部で，テーマとして「地域を捉える視角とそこから見えてくる課題」を掲げた。われわれは「地域」や「地域学」に関してどのような内容を提供することができたのか。２章と３章で，この点について検証する。

第１部の構成は４回の基調報告と３回のパネルディスカッションである。この章では，まず，基調報告の内容を紹介する。

第１回目の基調報告者は吉村伸夫教授（地域文化学科）である。本来の専門は英文学であるが，アングロサクソン系の政治哲学についても学識が深い。世話教員はトップバッターとして「地域」と「地域学」に関する原論的考察を期待した。タイトルは「今なぜ地域なのか－地域の文化的個性と『生の充実』－」である。

報告はまず地域を次のように定義し意義づけた。地域とは，「人間の生活をトータルにみたとき

---

[9] カリキュラムについては，現在，教務部会が見直しを検討している。なお，「学際的でない」という指摘については，地域政策学科では，調査実習も含めて，専門を異にする教員でチームをつくり，できるだけ学際的な授業を行うよう努力している。

[10]〔資料２〕「基調報告の概要（『授業理解』）」を参照。これは学生用に筆者が作成・配布したものである。

に現れてくるまとまりとその空間」であり，人間が自然に働きかけ工夫を凝らして「生の充実を実現する場」である。この定義から，文化が重要な要素のひとつとなる。というのも，何を「生の充実」とみるかは，まさに文化の問題だからである。しかしながら，このような意味の文化は，ノーム（norm: 地域に固有の行動規範・振舞い方・考え方や感じ方など）を含み，地域の人々にとって自明で検討対象にさえならない場合が多い。このため，地域の人々がもつ「文化的自己像」とノームを含む「文化的個性」との間には，不可避的にズレがある。「生の充実」のためには，まず「文化的個性」を的確に把握すること，次いで，「文化的自己像」との間のズレをできるだけ埋めつつ，これを豊かにしてゆくこと，この二つが必要である。これが地域学の抱える文化的課題であり，これに応えるには，ノーム研究を含めて，学際的な知を動員しなければならない。

以上，吉村報告は，「なぜ地域なのか」という問いに「生の充実」と応え，この観点から文化の重要性を指摘し，ノームへの批判的なまなざしの獲得を地域学の重要課題のひとつとして提示した。

第２報告は藤井正教授（地域政策学科）で，国内外の様々な地域について数多くの調査経験があり，地理学の立場からの実証的な地域理解が期待された。タイトルは「地域へのアプローチ－地理学的な視点から－」である。

報告は地域について次のようにいう。地理学では，地域とは，「自然環境の要素」（地形や気候など）と「人間活動の要素」（畑・広場・商店・工場など）とが絡み合って生まれたシステムである。がしかし，どのような視点（あるいは目的）に立つかによって，地域の意味も，空間的な大きさも，変ってくる。

地域は概念的に３つに分類される。「実質地域」と「認知地域」と「活動地域」である。「実質地域」は実際に存在するものの分布範囲や結合関係をもとに構成された空間（市街地や水田地域，通勤圏など）である。「認知地域」とは住民の意識のなかにある主観的空間（たとえばメンタル･マップ）をいい，現実の地域とは異なる場合もある。「活動地域」は何らかの働きかけをしようとするときに想起される空間（「都市計画地域」など）である。

空間の規模については，コミュニティ・レベルのものから国境を越える地球規模に近いものまで様々な規模の地域が想定できる。何らかの問題の解決，あるいは何らかの現象の解明をはかろうとするとき，それに必要で有効な規模の空間を選択して考えるからである。

これからの地域づくりという観点にたつとき，地域を機能別にみるだけでは十分ではない。環境･経済・社会・文化など複合的な視点から「地域の文脈」（その地域に特徴的な上記のシステム）を捉えること，さらには，長い時間を視野に入れて地域を捉えることが必要である。例えば，ハコモノ行政の場合，建設期間を過ぎれば顧みられることはほとんどなかったが，「地域の文脈」と「良質な生活」という視点に立った取り組みは「完成予想図のないプロジェクト」であって，継続的な努力と工夫を必要とする。

以上，藤井報告は，地域を実証的かつ実践的な観点から捉える。問題設定いかんによって地域の意味と大きさが異なるということは，「これこれの規模の空間が地域である」というように，地域を限定的・固定的に考えるべきではないということである。その一方で，地域をよりよいものにするには，地域の構造と特性（「地域の文脈」）を的確に把握したうえで，長期的視点にたった継続的努力が必要だということである。

第３報告は光多長温教授（地域政策学科）である。専門は地域経済学で，その学識は国内外の地域政策や地域振興など豊富な実践的経験に裏打ちされている。これまでの２名の報告者の視点は地域住民あるいは地域に置かれていたが，光多教授の場合，まったく逆に，国家の地域政策という大

きな枠組みでみたときの地域である。テーマも「地域を捉える視角と課題－経済と国土計画的アプローチ－」である。

タイトルの通り，報告は経済の論理と国土計画の論理という本来的に対立しあうものの関係を軸に進められた。まず，高度成長期における経済の論理について，経済にとって重要なのは経済的合理性（高い収益を効率的にあげるための合理性）であって，高度成長期においては，地域は第一義的な重要性をもたなかった。しかしながら，経済活動がどこか特定の地域に偏って，地域間で住民の生活にあまりにも大きな格差（所得格差など）が生じることは，国の安定的発展を損なうもので，好ましい状況ではない。このような観点から，国土計画は，時々の経済社会の枠組みを前提としつつ，「あるべき国土構造」の実現を目指し，高度成長期においては，「均衡ある国土の発展」を政策目的としてきた。つまり，経済活動にともなう歪みを是正しようとしてきたという。しかし，産業構造が変化し，サービス経済化，経済の国際化に伴って，国主導の国土政策の効果が限定的となり，地域政策は大きな変化を求められることとなった。いわゆる東京一極集中への対応である。

報告は，江戸時代以来の日本の国土構造の変化と地域政策の歴史をたどりつつ，こんにちでは，経済の急激かつ複雑な構造変化に対して国土計画の効果は徐々に限定的になったという。換言すれば，経済的合理性の論理による東京一極集中に対して有効な方策が見出せないのが実情なのではないか。こうした状況において，地域政策は国土計画の受け皿であることをやめて，地域自らが考案した振興策を国が支援する体制（「地域主体の地域再生」）に移行している。地域は自らの資源（文化的なものも含まれる）を見直し，自ら立案・実行しなければならない，というのである。

この報告で注目すべきは，高度成長期においては経済的合理性の論理と国土計画の論理とが整合性をもち，経済成長と国土計画との二つを実現させていったこと，しかし，サービス経済下，国際化の時代においては，もはや国主導の地域政策は有効ではなく，地域が自らの資源に目を向け，これをベースに地域の振興を図っていくことが必要になってきたことである。それはまた地域に資源の見直しを迫り，地域が文化的なものにも目を向け始めたということでもある。さらに，ある意味でいうまでもないことであるが，急速に変化する経済的な国土構造の変化を無視しては，効果的な地域再生などありえないということである。

地域の自立の必要性という認識を共有しつつ，地域の再生＝創造のための注目すべき視点と方法論を紹介したのが，野田邦弘教授（地域文化学科）の第４報告である。教授は文化政策の実務経験が豊富で，国内のみならず世界各地の取り組みにも通じている。報告タイトル「芸術・文化の創造性を活かした地域創造－創造都市論の立場から－」に示されているように，この報告のキーワードは「創造都市」である。

「創造都市」とは，市民の創造性（新しい考え方や価値を創出する能力），とりわけ芸術・文化の創造性を発揮して，新たな産業と経済的価値を生み出し，地域の課題を創造的に解決することのできる場である。なぜ芸術・文化なのか。報告によれば，「創造都市論」は，鉄鋼や造船といった重厚長大型産業の空洞化による都市の衰退と IT 革命など知的生産への産業構造の変化を背景として登場した。本格的知識社会の到来が予想されるなかで，芸術･文化の価値が問い直され，その比重が高まったということであろう。芸術･文化を起爆剤とした都市再生に成功する事例は 1970 年代からみられるようになり，90 年代頃からこの現象を「創造都市」として研究する潮流が顕著になったという。

報告では，国内外の成功例が紹介された。たとえば，衰退した工業都市で，文化的資源は豊かでなくとも，ユニークな設計の現代美術館を衝撃的にオープンして多数の来館者を集め，雇用を創出

したスペインのビルバオ市。行政の強力なイニシアティヴと多額の文化予算とによって歴史的・文化的資源を整備活用するとともに，市民の創造活動を中心に文化政策を展開して，フランスで最も住みやすい都市と高く評価されているナント市。演劇協同組合と行政とが協同して芸術文化によって市民生活の質を高め，さらに「欧州文化都市」制度を利用して，多様なイベントを開催し，旧工場施設をアート・スペース化して，市民層のさらなる参加促進につとめたイタリアのボローニャ市。国内では，休眠状態の地域資源をクリエイティブな人々と産業の集まる「創造の場」に変え，芸術文化と市民の活力を起爆剤に経済を活性化しようとしている横浜市の「クリエイティブコア（創造界隈）」形成の試みである。

３．第１部パネルディスカッション

⑴　１回目

司会役の筆者は，第１回目の冒頭で，次のように基調報告における共通点と相違点を指摘して，疑問点を提示した。共通点は，ひとつめは，世界と日本の現状分析で，こんにち，主体は国家（＝中央政府）ではなく地域であり，地域のことは住民自らが取り組み解決すべきだという認識である。２つめは，文化の重要性である。したがって，「地域」と「文化」が今という時代を読み解く鍵となる。最初の疑問点は，この２つがどういう関係にあるのか，ということである。

相違点は「地域」の意味である。たとえば，吉村教授の「地域」は「人間の生活をトータルにみたときに現れてくるまとまりとその空間」，「文化的なまとまりの空間」である。藤井教授の場合は「自然と人間が絡み合って生み出したシステム」，光多教授はおそらく「経済活動が展開される空間」であろう。野田教授の場合，明示されていないが，視線はとりわけ都市に向けられている。筆者の疑問は，報告者が「地域」という視角からものを考えるとき，具体的にどのような像を思い描いているのか，何を究極的な目的にしているのか，ということであった。さらに，素朴な疑問であるが，「地域」というとき，どれくらいの規模の空間が念頭にあるのかも知りたかった。最後の疑問は，地域の文化的個性と，普遍的なものとして扱われることの多い芸術文化とは，地域という観点から見たときどういう関係にあるのか，である。以上の諸点については，まとめて議論することはしなかったが，３回のディスカッションにおいて，学生の質問とそれへの回答のなかに，分散して，繰り返し現れた。

筆者のまとめと疑問点の提示に続いて，パネリストの渡部昭男教授（地域教育学科）と松本健治教授（地域環境学科）のそれぞれ10分間のコメント，さらに，基調報告者による「補足説明」と「学生の質問への回答」が行われた。これらを整理して紹介するのもひとつの方法であるが，記述内容と発言自体が興味深く，参考になると思われるので，できるだけ忠実に伝えることにする。なお，敬称は省略する。

渡部：子どもが一日を過ごすのは，なにも教室のなかだけではない。半分の時間は家庭や地域である。今日的課題を解き明かし，それに対処しようとすれば，学校とそこでの知だけでなく，地域を視野に入れた知や社会知が欠かせない。こんにち求められているのは，地域という多様な視点をもった教師であり，このような教師の教育を受けることで，こどもたちもまた同様の視点を獲得できるのではないか。地域教育学科の目的と価値はそこにある。

松本：地域を人々の「健康」という観点から見たい。まず，「健康」とはなにか。それは身体的な

状態のみをいうのではない。精神的，社会的，スピリチュアルな要素も含まれる。この意味で，人間全体が対象となる。「健康」の目指すところは，究極的には「生活の質」の向上であるから，考察対象も人々を取り巻く種々の環境，すなわち自然環境から社会的環境，文化的環境，家族・友人・仕事仲間といった人間関係など，実に多様な領域に及ぶ。この意味で，子どもの健康を見れば地域がわかる。

吉村：地域を「精神的な意味での生活の質の向上」という視点から考えている。地域の人々にとって「どのような状態が実現しているときに満足できるのか，幸せなのか」ということである。このような感覚を共有しているのが地域であり，「地域の個性」を構成する重要な要素である。地域学はこれを明らかにしなければならない。これを無視した取り組みは，熱意あるものであっても空振りに終わってしまう。

藤井：地域とは「生活の広がりと社会関係」をいい，空間的には，「コミュニティより大きくて，地方よりは小さなもの」を考えている。都市圏も地域である。地域はそれぞれ特性を異にしており，それぞれの地域にそれぞれの課題がある。地域学はこのような地域にターゲットを絞った総合的な研究であって，地域を多様な要素の組み合わせとして理解し，説明する。地域学には，自然法則のような，どの地域にも適用できるような法則はないが，ある地域についての説明のしかたは，同じような条件，同じような組み合わせのパターンをもつ地域であれば，応用できる。

光多：経済的に地域を考えるとき，次の３つに留意してほしい。①広い目で見る（地域だけでなく，日本や世界の動きにも目を向ける）。②変化しないものとしてではなく，動態的に見る。③経済の背景にあるものを合わせて考える，である。②の例を挙げれば，高齢化率や人口動態，一人当たりの公共投資額を県別に地図化して，その時間的変化をみていくと，県を越えた，共通の特質をもった空間（地域）が浮かび上がり，それが時期によって変化していることがわかる。

野田：これからは「国家の時代」ではないことをいうために，あえて都市をメタファーとして用いたが，決して地域＝都市ではない。都市の存在は重要だが，都市と非都市部との連携を考える必要がある。また，地域の文化と芸術文化との関係についても，前者を排除していない。無視しているわけでもない。これからの地域を考えるとき，何に注目し重視するかは，あくまで住民が判断することである。地域の目標は，自分の住んでいるところがいいところだと思えるようにすること，こどもや他の地域の人々にも住みたいと思ってもらえるようにすることだろう。それでは実際にどうするか－たとえば，地域に伝統的に存在するものを押し出すのか，それとも地域に根ざしてはいないが，住民が求めていそうなものを採用するのか，都市開発と文化破壊という難問を具体的にどう解決するか－は，住民が自分で考えるべきことである。地域学はその手がかりを提供するものだ。

回答に続く討論

柳原：地域について考えるとき，吉村教授は「文化的個性」に，光多教授は「動いていく経済」に着目している。「文化的個性」は容易には変化しないもので，その意味で地域の静態的側面に目を向けているといえる。吉村教授は光多教授の指摘をどう考えるか。

吉村：経済論理も国土計画も，実は同じ尺度を用いて考えているのではないか。つまり，人間を経済的合理性に基づいて判断･行動する存在と捉え，その幸福を何よりも経済的豊かさで見ようとしているのではないか。経済原理が基本であるから，財の不均衡配分（経済的格差）という現象にどう対処するかで，両者の見解が分かれているにすぎない。「文化的個性」というとき，

経済的豊かさとは異なる尺度で考えている。

光多：地域を見る目は，日本の社会経済的状況の変化にともなって変わってきた。確かに，地域の個性がかえりみられなかった時代が長く続いた。しかし，こんにちでは，人間・自然・産物・文化など，地域の資源が見直されている。歴史や伝統をふまえていない，とってつけたような取り組みは，効果を上げることができないし，長続きもしない。地域の個性は変わらないが，経済発展にともなって，それにどう向き合うかという問題がある。

吉村：日本の場合，一定程度の豊かさ，物質的水準に到達しているからこそ，個性について語ることができる。物質的充足を無視しているわけではない。

野田：大量生産されたものをみんなが同じように消費する時代は終わり，今や多品種・少量生産の時代になった。あるものの価値を認める人，好む人が買ってくれるという，文化や感性が重要な時代である。つまり，産業構造が変化して，考え方も変わってきている。あまり変化しない地域の文化と芸術文化との関係については，確かに地域にとって前者が基本だが，若い人の関心を引かない。大都会が好きで行きたがる。若者にとって都会は魅力的だ。さまざまな人，さまざまなものがあり，刺激に富んでいて面白い。したがって，光多教授の見解とは異なるが，伝統に根ざしているものでなくとも，面白いからやるということがあってもいい。実際に，そういうケースがある。

⑵　２回目

「学生の質問･意見」は多岐に及んでいるが，次の４つに大別できる。①地域学は何を目指しているのか，②地域とは何か－とくに文化との関係で－，③地域の個性・資源と地域づくりとの関係はどうかあるべきか，④観光と地域づくりとの関係，である。授業では，③と④について議論した。なお，質問と回答はすべて印刷して，事前に学生に配布している[11]。

以下は配布資料の一部である（回答は一部省略しているところがある）。

①地域学は何を目指しているのか

Q：地域ということで何を到達目標としているのか。どんなことに価値があると考えるのか。全体的にまたは時代によって何か求めているものがあるのではないか。

野田：暮らしやすく，誇りをもてる地域を創出するため，力をあわせることを目指している。そのためには，まちづくりの知恵＝創造性が必要だ。

藤井：多様な要素（視点）を関連づけての複眼的な思考方法だ。

吉村：究極的な価値は，人の生をより good にすることだ。

家中：ある問題を解くのに，「地域」という視点・分析枠組をとるとよいと判断するから，「地域」について考えることになる。

②地域とは何か－とくに文化との関係で－

Q１：地域学部のいう地域とは，どのような範囲か。

藤井：ベストはない。ターゲットに応じてスケールは変わる。地域学部としては，コミュニティか

---

[11]〔資料４〕「学生の質問と意見」を参照。

それより大きくアジアなどの文化圏まで。

吉村：広がりは，焦点化する問題次第で変わる。たとえば，公教育に問題意識の焦点があれば，おのずからそれなりの枠組みが現れるだろう。

家中：「地域学とは何か」，「地域学部のいう地域とはどのような範囲か」ということを考えるのが地域学。人間とはなにか，と問うてもあらかじめ出来合いの答えがないのと同じ。また，どのような課題を解決しようとするのかに応じて，どの範囲を「地域」として設定するのかが変わる。これまでの枠組（視点）では解けない問題があるから，そのために別に新たな枠組（視点）として「地域」を設定することにした，ということだ。

Q２：地域の根底に文化があり，その文化にも残っている文化，動いている文化，これから発展していく文化がある。このような文化があるから，地域の違いが出てくるのではないか。

野田：そのとおり。文化にも様々な存在様式がある。

Q３：地域＝文化だとすると，地域は文化のなかにあるのか，地域のなかに文化があるのか。

野田：地域＝文化ではない。地域を考える上で，最も重要な要素が「文化」であるということ。地域には，「経済」，「社会」，「政治」など様々な要素があり，それぞれの視点から地域をとらえることができる。その中でも，もっとも根源的なものが文化の視点から地域をとらえる視点である，という意味。

藤井：文化という言葉をあまり使いすぎない方がいいと考える。説明がクリアーでなくなる。

光多：文化という言葉で何を言っているかは，人により異なっていると思う。私は，文化の概念を人々の考え方，生活様式，食べ物，付き合い方等，幅広く捉えている。言いってみれば，社会のプラットフォーム全体を文化と言っている。

③地域の個性・資源と地域づくり

Q：地域資源とか，地域の特色というものは，その土地に昔からある伝統的なものを発掘・発展させるべきなのか，それとも新しくつくりあげるほうがよいのか。伝統的なものがぱっとしないとか，ほとんどない状態の地域の場合はどうしたらいいのか。また伝統的なものが現在のニーズに合わない場合はどうか？

野田：必ずしも昔からある伝統的なものそのままでなくてもよい。伝統は常に革新されなくては現代に生き延びないと思う。また，まったく縁もゆかりもないものでも，そこ（地域）から起こり発展していくものならよいと思う。要は，市民の創造力＝想像力の発揮である。

藤井：地元のコンセンサスがあれば，新しいものでもいい。地方都市再生の有名な事例である滋賀県の長浜のガラス，沖縄竹富島の赤瓦も，伝統ではない。ただし，こうした新しい文化を取り入れていく土壌が必要だ。

家中：自分たちにとって「伝統」とはどんなものなのか。自分たちにとって守り育てていきたいこと，大切にしたいことは何かについて，地域住民が考えることが大切だ。そういう状態をどうつくっていくかが政策上の課題だろう。

吉村：地域の個性の中でも，地域の人々が自らの地域についてどういう像を描いているのかに，注目する必要がある。さらにその中でも，何がその地域の人々の生の質を保証しているのか（その際，充実感や安心感や安息感といった尺度のどれが重要かも，地域の文化的個性だ）に注目する必要がある。物質的充足や多様な出会いの機会だけが生の満足度を決める要因ならば，都会と田舎は「中央と地方」の関係にあって，両者の勝負は，最初からついている。だが，たと

えば，現在の暮らしから何が欠ければ，やがて生活に空虚感を覚えることになるのかという問題を考えることは，自分にとって自明性をもつ尺度について考えることなので，じつは素朴には行えず，学問的な方法論が必要になる。地域の文化資源を観光資源という面からだけ考えるのであれば，「伝承」でも「創出」でも，話題性と集客力を目指す企画の中で，その必然性に従えばよい。しかし，観光客は溢れたが人々の暮らしはむしろ空虚になった，あるいは荒廃した，では，仕方がないのではないか。

④観光と地域づくり

Ｑ１: 地域づくりの最も基本となる要素に「住みやすさ」,「活力」,「誇り」とあったが，観光は「活力」に関わってくるのか。地元住民のための地域づくりと，住民以外の人々をターゲットにしたものとは違いがあるのか。地域づくりと観光はどういう関係なのか。

野田：大変いい質問だ。実はこのポイントはものすごく難しい。観光振興は地元住民の利害と対立することも多い。政策化段階では十分な配慮を要する。

光多：観光には（特に移動が困難な時代には）宗教的な交流を意味していた面もある。即ち，地域の資源を活用して人々が交流することによって，地域の人々と地域を訪れる人々がより良い人間になるという面がある。従って，ヨーロッパでは伝統的に観光が地域づくりの大きなコンセプトになっているケースが多い。

家中：経済的に収益をあげようとするとき，観光振興に期待する地域は多いだろう。そういう次元とは別に，現代は，「生産をあげる」ということ自体が問い直されている時代といえるだろう。ハードのものをつくるより，ソフトのものをつくっている。さらに考えを展開すれば，モノそのものより，人と人を結ぶこと，すなわち「関係性」が追求されている時代ということもできる。

Ｑ２: 地域課題の解決をはかるとき，何かを重視し何かを棄てなければならない場合がある。そのようなとき，どのような基準に基づいて，どのような方法で，判断・決定すべきか（趣旨をくんで筆者が整理している）。

吉村：結局は「何かを重視し何かを棄てなければならない」ので，その尺度が問題になる。鳥取市鹿野町の祭りがよい例となるだろう。本家の祇園祭より古い形式を保存してきた祭りだが，観光資源化するかどうか，ずっと問題になっている。祭りの間はどの家も開放され，誰が入って飲食しても良いが，これはじつは，町の人間しか祭りに参加しなかったからだ（鹿野町でも，城下町地区以外の人々は祭りに冷淡だ。そのことも知る必要がある）。開放してうまく宣伝すれば金にはなるだろうが，そうすると近代的な時間と空間が持ち込まれ，昔の日本の祭りの時間（進行表はないに等しい）も空間（無礼講空間）も，観光客の都合に合わせて消える。このことの意味を考えてほしい。

【ディスカッション】

ディスカッションでは，上記のうち学生にとって身近な③と④について検討を加えた。

「地域の個性・資源と地域づくり」について

家中：地域の個性や資源を評価することはなかなか難しい。地域の人だけでは決められないこともある。むしろ，地域外の人との相互関係の中で決まってくるといえる。

吉村：地域の人にとって自明なことであるから，自分達では決められない。自分達の尺度で見たと

きと，他地域の人が見たときとは評価が違う。たとえば，鳥取市八頭町の花御所柿の光景は私の目には素晴らしいものに映るが，地元の人たちには当たり前の見慣れた光景でしかない。だから，いくら素晴らしい，これを広く紹介すべきだといっても，まったく反応がない。

光多：地域振興策は「シーズとニーズとニューズ」の３つがそろって初めて効果的であるといわれる。つまり，それを受け入れる苗床（土壌），意欲と動機付け，現代にマッチングさせることが地域おこしには必要だ。他の地域でうまくいったからといって，どこでも成功するわけではない。

野田：地元の人は地元のよさに気がつかない。外の人間にわかるのは，他のところと比較するからだ。そういう意味では，世界中歩いている人の方がわかるから，地元の人だけでするとうまく行かないことが多い。

観光と地域づくり

野田：過疎地域は外から人に来てほしい。これは切実な願いだが，本当に人がきたら，車の騒音だとか，ごみだとか，困ったことになる場合がある。また，イタリアのベニスのような世界的な観光地でも地元の人は苦しんでいる。たとえば，生活する場所でないとか，自動車が入ることができないので，人が運ばねばならないとか，若者の流出も続いている，とかである。結局，どんな観光客にどれくらい来てほしいか，地元の選択になる。

光多：どんちゃん騒ぎをすることばかりが観光ではない。巡礼の道のように，危険を冒してまでも旅をする人がいて，そうした人々を地域の人がおもてなしをするということもあった。観光は，他の地域の人々をもてなし，交流する機会でもある。地元の人が地元のよさをよく知って地域づくりをしておもてなしをするという意味もある。

家中：地域の人たちがもともとそこにあったものに工夫を加えて，魅力ある観光地になったとする。そのために観光ガイドブックなど，メディアで紹介され多くの観光客が訪れるようになる。それは確かに成功といえるものだが，同時に，マーケットに巻き込まれ，それに従属することになるのではないか。航空会社とかエージェントの送り出す観光客を受け入れざるを得なくなるという事態も起こりうる（意味を汲み取って筆者が改変した）。

吉村：大勢の人が来ればいいというものではない。鳥取の海岸でよく見かけるサーファーの例を挙げれば，彼らはお金をまったく使わない。シャワーさえ使わないで，ごみだけ残す。地元の人から見れば，邪魔なだけだ。最初に地元の人たちがどのようにサーファーに接したかという問題があるかもしれないが，結局，人が来ても何もいいものが生まれていない。また，取捨選択もある。回答でも述べたが，鹿野町の祭りは古いものが失われずに残っている素晴らしい祭りだが，かなりの費用を要するという問題がある。祭りを観光客に「オープン」にして観光資源化すれば，この問題をクリアーできるかもしれないが，確実に何かが失われる。たとえば，時間を気にしないでしてきたことを時間通りにしなければならなくなり，祭りの本質が失われてしまう。つまるところ，住民がどういう選択をするかだ。

【設定されたテーマに関する討論：「なぜ地域という視点から考えるのか。地域という視点を設定すると，何が見えるようになるのか。」】

家中：なぜ地域学をするのか？今までの学問では扱えないことが起きてきたからだ。敢えて地域学という分析枠組みを創ることによって，これまでとは違ったふうに物事を捉える新しい道具をつくろうということではないか。

吉村：近代とは基本的に西洋化であり，単一の尺度になっていった。おそらく，近代は今や破産状態にある。もはや単一尺度ではやっていけない。じゃあどうするのか，というところで，個性を発見するために，地域という見方が出てきた。踏みとどまる場として出てきたのが地域であり，地域学である。

藤井：すでに述べたように，地域学ということで，多様な要素（視点）を関連づけての複眼的な思考方法を目指している。いま少し説明すれば，近代は一つのものに一つの役割だけを当てはめてきた。たとえば，川については治水だけを考えた。大量の雨を海までいかに迅速に運ぶかを考えて，川岸をコンクリートで覆った。しかし，実際には川の役割はひとつだけではない。水辺空間のように，水に親しむという捉え方もある。多少危険があっても，水の楽しみを大事にするという選択肢もある。つまり，複数の見方があり，複数の価値観がある。それらのなかから，地元がどれを選ぶかというところで，地域という見方が必要になる。答えはひとつではない。地域の個性や住民の意思が選択を決定するのだ。

光多：「地域学とは何か」を勉強するのが地域学である。日本地域学会の地域学の定義は「空間概念を通して種々の事象を分析すること」である。つまり，これまで縦に並んでいた諸学問を横に串刺しすることだが，串刺しにする方法の一つが地域学である。

野田：これまで別個に存在してきたそれぞれの学問分野を一緒にして考える。しかし，それではわけがわからなくなるので，「地域」に着目して考える。人間は元気になればいろいろ考えることができるようになるが，元気でないと悪いことばかり考えて何もできなくなる。だから元気になることが大事だ。いいものを見つけ出して元気になる。それを実践するためには理論的な枠組みが必要だ。それが地域学である。

松本：地域の人々の生活を向上させるための学問である。

渡部：視点を変換できるということではないか。視点を変えることで，対話と発見が可能になり，自由度が増す。

⑶　３回目

学生の「質問と意見」は二つの問題をめぐるものだった。「観光と地域づくり」と「なぜ地域なのか，なぜ地域学なのか」である。以下は前半が前者について，後半が後者についての回答及び議論である。「観光と地域づくり」については，光多教授から長浜市の「黒壁スクエア」について実に興味深い紹介と分析があった。これをめぐる討論から地域づくりの試みを評価することの難しさがよく理解できたが，細かすぎるので，ここでは割愛する。

回答と討論：観光と地域づくり

吉村：地域という枠を選んでなにが見えるのか。個性が見える。中央 - 地方関係からの脱却だ。中央や経済的に豊かなところから来た人にお金を落としてもらうという発想で観光による地域づくりをしたのでは，テーマパークと変わらない。地域の個性とまったく関係がない。地元の人が享受できて，経済的収入にもなれば，最高の観光による地域づくりである。

藤井：黒壁はテーマパークか？そうとばかりはいえない。地元とつながっている部分がある。もっと慎重に検討すべきだ。地元のシンボルとして元銀行を残している。地元の住民活動とのつながりもある。また，住民といってもいろいろな立場があり，決して一枚岩ではない。したがって，テーマパークか伝統的な文化か，というふうに両極化できない。地元の経済とのつながり

も確認すべきである。

光多：確かに日本の観光業は施設に偏重している。観光は，本来，人である。ヨーロッパでは，観光客がペンションに長く滞在するので，みながいわば家族のようになる。地元住民と観光客との関係は，地域の人たちが他の人とつながりをもとうというのが大事だ。そういう例は，日本にもたくさんある。日本のテーマパークは失敗例である。ヨーロッパでは，テーマパークといっても自分たちの地域の歴史をテーマとしているが，日本では，みんな外国のテーマをもってきて，立派な施設を作った。これではうまくいかない。自分たちの歴史をテーマにおもてなしをする，これが観光の原点だ。

野田：日本では，観光振興は国土交通省の所管だ。文化庁ならわかるが，人を運ぶ手段としての交通の専門部署が観光にあたっている。勢いお金を使えということになる。地域に固有の文化資源を活用するか否かということと，地元の人が満足するかどうかは，基本的には関係がない。問題は，どういう方向でいくかを地域の人が決めることだ。産業がなくて観光しかないところは，観光でいくしかない。たとえば，インドネシアのバリ島では，観光でいくことを選択したが，踊りにしても観光用と伝統用を分けて，伝統を保っている。

論点１　なぜ「地域」なのか

質問：空間を区切るもの，区分するものとして，すでに都道府県や市町村といった行政区画がある。諸制度も行政も，さらには諸々の調査・研究でも，基本的にこの単位にしたがっている。こんにちが地方分権の時代であるとしても，自治体単位でいいのではないか。なぜ「地域」という視点が必要なのか。

論点２　なぜ「地域学」なのか

質問：既存のディシプリン（学術分野）のうち，いずれかを学び修得した知識をもって地域に取り組むのでは，不十分なのだろうか。「地域学」で学ぶべきもの，「地域学」でなければ身につけることができないものがあるのだろうか。

吉村：行政の枠組みではうまくいかないところがある。たとえば，国道 29 号線は鳥取県，岡山県，兵庫県にまたがっているが，この道路利用の衰退という懸念から沿線の人々が連携した取り組みが始まっている。県の関係者もこれに関わっている。このような動きは，行政の区割りをとっぱらってしまうとよくわかる。つまり，ここでは行政区画をこえたところで合意形成がはかられているのであって，ここにひとつの地域が現れているといえるだろう。

藤井：地域は自治体だけではない。生活圏や祭りのコミュニティという地域もある。自然のまとまりとして流域圏が挙げられるが，それは自然をどう利用するかという点において文化的なまとまりにもなっている。つまり，どこに焦点を当てるかによっていろんなくくり，すなわち地域が見えてくる。例を挙げれば，琵琶湖の水を守ろうという運動があるが，もともと，水辺の植物を伝統産業が使ってきたから（燃やしてきたから），葦が生きてきて，水環境を維持できたのである。ここに，自然環境と文化と産業との関連をみることができる。このような関連に目配りをするということ，これこそ地域学部が他の学部と違うところである。

光多：学問とは，元来，「人間とは何なのか」を考えるもの，すなわち，哲学であった。やがて学問の分化が進み，経済学，法律学，社会学というように学問領域が細分化されていった。その

結果，本来の「人間とは何なのか」がわからなくなってしまった。そのため，いまや総合化に向かっている。総合化にもいろいろな仕方があって，地域学もそのひとつである。「人間とは何か」を考える切り口のひとつが地域学である。

野田：サステイナブル・シティ（持続可能な都市）は，同時に文化的なクリエイティヴ・シティ（創造都市）でもある。つまり，地域活性化の方法はいろいろあるが，それは個別でなくて連動しているのである。地域の人たちの価値観はひとつでない。観光化とか地域振興をすれば生活に影響がある。これを犠牲と見るか，好ましいとして歓迎するかどうか，問題は地域の人たちの価値観である。したがって，重要なのは，住民が話し合い自己決定することだ。これができれば，いろいろな問題が解決できる。できていないから，中途半端なことをしては失敗するのである。

渡部：他の学部では，専門の枠内で考え，それを疑うという気持ち起こらないであろうが，地域学部では，地域学という触媒を通じて他の視点に転換することができる。

柳原：時代が地域という枠組みで考えることをわれわれに要請しているのではないか。あらゆる学問を総動員して考えなければいけないのではないか。

４．第１部のまとめ

以上，第１部のパネルディスカッションの様子を長々と「再現」してきた。本稿の冒頭で述べたように，この授業の目的は学生たちに地域と地域学に関する一定の理解を提示することである。第１部はそれを果たすことができたであろうか。上述の回答やディスカッションから，地域と地域学に関してどのような理解を引き出せるだろうか。

そもそも，いまなぜ地域なのか，地域とは何なのか。この問題は次の２点で説明できるだろう。ひとつは，近代化とグローバリゼーションという，すべてを押しつぶしてしまうような均質化の波が押し寄せるなかで，人々の「生の充実」，「生活の質」に関わる，失われてはならない何かがある，一定の広がりをもった空間に共有されている何かがある，という認識であろう。吉村教授はこれを「地域の文化的個性」と表現している。また，国家や国境の重みが低下したことによって，これまでみえにくかった結びつきが顕在化し，その存在価値が注目されるようになったこともあるだろう。

もうひとつは，国内事情である。光多教授や野田教授が指摘したように，国家の財政破綻等のために，もはや「中央＝地方」という垂直的関係は維持できなくなった。「地域」は自立せざるを得ない。こんにち「地域の自立」と表現される「地域」とは，権力・権限・権威の垂直的関係を前提とした「地方」とはまったく異なる概念なのである。

「地域」の捉え方には２通りあるように思われる。まず，「地域」は，必ずしも行政のような制度的な枠組みを排除するわけではないが，より不定形な結びつきをもつ実体としての空間を指しているように思われる。「人間の生活をトータルにみたときに現れてくるまとまりの空間」，「自然環境の要素と人間活動の要素とが絡み合って生まれたシステム」，「多様な要素の組み合わせ」と表現される「地域」がそうである。吉村教授は，「精神的な意味での生活の質の向上という視点から考えて，どのような状態が実現しているときに満足できるのか，幸せなのかという感覚を共有している空間，それが地域である」とも述べているが，この意味の地域はまさに文化的空間である。

他方で，「地域」が分析の枠組みとして使われる場合もある。藤井教授によれば，「どのような視点に立つかによって，地域の意味も，空間的な大きさも変わってくる。」家中助教授は「どのような課題を解決しようとするのかに応じて，どの範囲を地域として設定するのかが変わる」という。

統計的に捉えられる地域もある。光多教授は，複数の指標を地図化したときに現れる「共通の特質をもった空間」を地域とみている。

空間の規模については，「生の充実」，「生活の質」，住民の意思決定といった観点から比較的小さな空間が想定されているように思われる。分析枠組みとしての地域の場合，当然のことながら，問題に応じて大小さまざまな空間が考えられる。経済的観点から見れば，光多教授が述べているように，個々の地域というよりも，そうした地域が織り成す構造の方が重要であろう。

それではこのような多様な空間を研究対象とする「地域学」とはどのようなものなのだろうか。ディスカッションでは，「地域学」の目的として，吉村教授は，「人の生をより good にすること」，「生の充実」を挙げ，文化の重要性を指摘して，ノームへの批判的まなざしの獲得を地域学の重要な課題としている。藤井教授の場合，「行政の区割りでは説明できないのが地域である。この地域を理解するには，それを構成している様々な要素の関係性，連動性への目配りが必要だ。これをするのが地域学である。」野田教授にとって，「暮らしやすく誇りのもてる地域を創出すること，自分の住んでいるところがいいところだと思えるようにすること，こどもや他の地域の人々にも住みたいと思ってもらえるようにすること」が目的である。さらに「実際にどうするかは住民が自分で考えるべきことで，地域学はその手がかりを提供するものだ」という。以上から，「地域学」とは，「地域」という空間で住民が自らの「生の充実」，「生活の質を高める」ことを目的とする実践的な学である。したがって，その対象は人の生に関わるすべてのことがらに及ぶ。「地域学」は必要な「道具立て」をあらゆる学問領域から調達しなければならない，といえるだろう。

次に，「地域学」が実際に果たすべき役割をディスカッションにそっていま少し具体的に確認しておこう。ほとんどのパネリストが強調していたのは，住民の意思の重要性である。これは「地域の個性・資源と地域づくり」，「観光と地域づくり」に関する討論の中で繰り返し主張された。というのも，これからの地域づくりを前にして，住民が難しい選択を余儀なくされる場合があるからである。

たとえば，討論では次の点で見解の相違がみられた。吉村教授によれば，「地域の文化的個性や地域の人々の生の質を保証しているものを無視した取り組みは，熱意あるものであっても空振りに終わってしまう。」光多教授は，「歴史や伝統をふまえていない，とってつけたような取り組みは，効果をあげることはできないし，長続きもしない。」自分たちの歴史や文化を大事にして地域づくりをし，他地域の人々をもてなしてきたヨーロッパと，まったく何の関係もないものを外国からもってきてテーマパークをつくってしまった日本との間には，この点において大きな違いがある，という。これに対して，野田教授は，「地域に固有の文化資源を活用するか否かということと，地元の人が満足するかどうかは，基本的には関係がない。」「まったく縁もゆかりもないものでも，地域から起こり発展していくものならよい」という意見である。

しかしながら，仔細に見れば，両者の見解は必ずしも全面的に対立しているわけではない。この点について，藤井教授のコメントが大いに参考になる。確かに，藤井教授も「地元のコンセンサスがあれば，伝統にない新しいものでもいい」という意見であるが，「新しい文化を取り入れていく土壌が必要だ」，「地域の個性や住民の意思が選択を決定するのだ」という発言が示しているように，地域の個性との関連が前提条件となっている。つまりこういうことである。従来地域になかった新しいものであっても，それが地域の個性を反映した社会プロセスに根ざしたもの，あるいは個性をつくるメカニズムの延長上にあるものであれば（たとえば，竹富の赤瓦や長浜のガラス），外部資本のテーマパークとは全く違って，「地域の本物」なのではないか。この意味で，地域の個性と本

当の地域づくりの間には連続性がある，というのである。

こうした議論からわかることは,「地域の個性」(地域の歴史･伝統･文化)と地域づくりとの間には,正解のない，難しい問題が潜在しているということである。それだけに，実際に決定するのは住民の意思をおいて他にないのであるが，この場合，地域学の役割とは何であろうか。無論，解答を用意することではない。地域住民にとってまず必要なことは,「地域の個性」を知ることであるから,「地域の個性の構造やメカニズムにアプローチする方法論を文化・経済・空間・政策などの側面から提示すること，いいかえれば，住民が意思決定をするために必要な判断材料にアプローチする方法，これを提示することだといえるかもしれない」(藤井教授)[12]。

論理的には，おそらく以上のような整理が可能であるが，現実的にはかなり難しい側面があるように思われる。何よりも住民の意思決定それ自体がきわめて難しいといわねばならない。地域は多様で，捉えがたい。とすれば，意思決定を行うべき地域住民とはいったい誰なのか。さらに，こんにちでは，個人化が進み，多様な欲求や願望がある。そうしたなかで，いかにして合意に至ることができるのか。地域学が実践の学であるとすれば，吉村教授が基調報告で指摘したように，住民の合意形成の仕方それ自体も考えなければならない。地域学の対象は広い。

5．学生による授業評価

学生には第１部終了後，レポートの提出を求めた。課題は,「地域や地域学に関するテーマを自ら設定し，それについて授業で論じられたこと (配布資料の内容も含む）を簡潔にまとめた上で,1200 字から 1600 字程度で, 自分の意見を述べなさい」である。例として「観光と地域づくり」,「地域という視点」,「今なぜ地域学か」,「地域学の学際性について」などを挙げておいた。採点にあたったのは４名の基調報告者で，それぞれ１学科の学生を担当した。

採点者の講評によれば, すべての学科において地域と地域学について認識を深めることができた,また問題を掘り下げたレポートもあった，ということである。他方で，自分の学科で学んできたことと第１部の内容との違いが大きすぎて，戸惑ってしまい，学科の枠組みをこえて思考することができなかった学生もいたという。全体的には，われわれ教員は第１部の試みが学生たちによい刺激を与え，知的成熟をもたらしたと判断した。

ところが, 第２部終了後に学生たちに書いてもらった「授業評価」の結果は, 意外なものだった。「評価」は, 問１～10 までが「授業内容の進め方」に関するもので, その後に「満足度」の項目があった。「授業評価」は学科ごとに集計されていたので，それぞれの学科の反応を知ることのできる貴重なデータであるが，総じて，学生たちの評価は高くなかった。以下は，学科ごとの評価である。最初の数値は「授業内容の進め方」の平均値, ２つめが「満足度」の平均値で, いずれも３が「普通」である。

地域政策が 3.59 と 3.25, 地域環境 3.53 と 3.09, 地域文化 3.36 と 2.55, 地域教育 3.04 と 2.21 である。率直に言って，教員としては，２点台などあってはならない評価であるし，３点台の前半というのもできれば避けたい。ところが, 数値で見るかぎり,「まあまあ」なのが, 地域政策と地域環境の「授業の進め方」評価だけで，地域教育と地域文化の場合，明らかに「不満足」である。「授業内容の

[12]なお，この地域の個性とは，歴史・伝統・文化，あるいは経済活動といった人間活動に関わるものだけではない。地形や生態系などの自然環境と人間活動の関係も含まれることは，藤井教授が基調報告で指摘した通りである。

進め方」も３点台をようやくこえるか前半にとどまっており，かなり低い。これだけでも筆者としては未体験ゾーンで，大変なショックであったが，地域教育学科の自由記述欄には「学科差別」とか「学科バッシング」という言葉さえみられた。これほど強烈ではないにしても，同じような意味の記述が他にも数名あった。また，「意味のない授業だった」という感想もあった。

まったく思いがけない結果で，言葉を失ったが，冷静になって考えてみると，これは打ち捨てて置けない事態である。地域教育学科の学生たちの反応はどこに原因があるのだろうか。容易に推測されることは次の点である。自由記述欄で，「地域調査をしていないにもかかわらず，それについてレポートを書かされた」とあるように，第２部で２年次の地域調査実習をベースに授業を組んだことである。確かに，地域教育学科では，どういうわけか，地域調査実習という形では授業が組まれていなかった[13]。世話教員は授業プランを作成したのちになってこの事実を知った。その理由は不明であるが，もはやプランの変更はできないので，できる限りの手は打ったつもりである。第２部については，レポートも同学科用の課題を特別に設定し，地域教育学科の教員が採点した。

しかし，これだけでは「不満足」の説明がつかない。地域文化学科の場合も，「不満足」が表明されているからである。２つの学科の場合，「授業の進め方」に関する回答でも「面白くない，わかりにくい」と解釈できる反応がみられたので，この点，吟味する必要がある。

そこで地域文化学科の学生で学生のパネルディスカッションでパネリストをつとめた学生に聞いてみたところ，次のような答えが返ってきた。まず，授業全体で何をしようとしたのかわからない。報告内容があまりにも難解だったので，授業全体の最後に「まとめ」をしてほしかった。基調報告者も報告内容も特定の学科に偏っていて，政策的なものが中心だった。さらにステージと学生との間に距離があった。ステージで勝手に議論が進んでいくと感じたこともある。学生のなかには，耳を傾けている者とただ座っているだけの者がいたが，前者の場合でも，きちんと理解するまでには至らなかったのではないか[14]。

これに関してはわれわれ世話教員も心配し対策を練ったところだったので，この学生の回答はかなりショックであった。あれほど会議を重ね，基調報告で「概要」と「理解」を，ディスカッションで「質問と回答」を作成・配布したのに，それでも理解できないのかとがっくりきた[15]。本稿の執筆は話し合いで決まっていたが，学生の評価を知って書く意欲を失ったほどである。それでも，

---

[13]地域学部を創設する際，全ての学科で２年次に地域調査実習を行うことが取り決められていた，と筆者は記憶している。

[14]以上は，口頭で確認したことである。このほかに，〔資料５〕井　七恵「『地域学総説』の感想」を参照。ともに同一学生のコメントである。掲載については，ご本人の了承を得ている。

[15]学生による授業評価については，より精緻な分析ともう少し慎重な解釈が必要かもしれない。たとえば，次のような見方がある。「総体として，３点ほどの評価点であったとしても，その数字から読み取れることには，いくつか可能性があると思われる。たとえば，ひとつには，全体的な，平均としての評価である。もうひとつは，学生によって，授業の受け止め方にかなりの差（ばらつき）があったという推測もありえる。つまり，教員が意図した水準で授業を受け止めた学生もいるにはいたが，それは少数に限られており，大多数の学生にとってはその切実な問題関心には迫れなかった。そのために，総体として，評価点は半ばであったということである。この場合，総じては，講義として反省するべき点が大いにあるにしても，学生と教員とがまったくすれ違っていたとも言い切れない。」（世話教員の家中茂助教授）

[16]配布資料は教務係前のテーブルに置いた。しかし，残念なことに，いつまでたってもその量はほとんど減らなかった。繰り返しアナウンスをしても，である。膨大な時間をかけて作成したわれわれ教員にとって，これほど悲しいことはなかった。

本当にわれわれの授業に問題があったのか確かめたくなって，授業のデータ，配布資料，ディスカッションの録音など，すべて見直してみた。その結果，次の結論に至った。

学生が配布した資料を熟読したかどうかわからないので[16]，それはおくとして，結論は，少なくとも，提供する教員の方にも足りないところがあったということである。本稿をここまで我慢強く読んでこられた方はどう思われただろうか。授業では「４．第１部のまとめ」はないので，「３．第１部パネルディスカッション」まで読まれて，地域と地域学についてまとまったイメージをもつことがおできになっただろうか。答えは「ノー」ではないかと思う。内容自体はとても興味深く刺激的であったと筆者は自負している。しかし，学生が地域学についてうまく説明できるようになったかというと，多くの学生の場合，無理ではないだろうか。正直なところ，筆者自身，「まとめ」を書くのに苦労したので，そう思うのである。筆者の「まとめ」が妥当なものか否かはともかく，そういう機会を授業で用意すべきであったと今は思う。そうしていれば，パネリストの方々がきっとうまく総括されたであろうし，学生もそれなりに満足をえることができたであろう[17]。

おわりに

本稿を終えるにあたって，感想めいたことを少しばかり書いておきたい。この授業はとにかく大変であった。授業の準備，「感想」や「質問と意見」の分析，「回答」などの配布資料の作成，実際の授業進行，授業後の話し合い，反省会など，８名の教員の努力は並大抵ではなかった。終わってほっとしたのというのが実感である。しかし，その半面で楽しくもあった。専門の垣根を越えて，これほど話し合うことなど，めったにできる経験ではない。

本稿を書きながら思うことは，この授業にはもうひとつ別に目的があったのではないかということである。本来なら，「地域学総説」の目的は，地域学に関する理論的な全体像を提示することである。しかしながら，地域学は新しい学問で，残念ながらまだ全体像を示すとまではいかない。この事実を率直に認めれば，「総説」のもうひとつの目的は，教員が協同して地域学を創っていくことであろう。この意味で，本年度の試みはそのための第一歩，チャレンジであった。

学生たちに十分な満足を与えることができなかったとしても，確かなことは，学生も教員もこの授業から多くの知的刺激を受けたことである。この授業の最大の貢献はおそらくそこにあるだろう。もちろん，先述したように，授業としては不完全であり，反省すべき点が少なくない。そこで反省会では来年度の授業のために次のような決定を行った。学生に「地域」と「地域学」について理論的な部分も含めて早くから考えてもらうために，１年の「地域学入門」と２年の「地域調査実習」，３年の「地域学総説」をもっと連動させること。具体的には，各学科から少なくとも代表２名を出して「企画会議」を設立し，この会議で「入門」と「総説」双方の授業プランを作成する。授業の運営も担当する。これで，学生から批判を受けた地域文化と地域政策への偏りもいくぶんか克服できるはずである。地域調査実習については，地域教育学科では既にカリキュラムの再検討を進めている。今後は，本年度のような問題はなくなるであろう。また，授業の成果は，今回のように文章にして公表すれば，学部全体で共有することができる。このような活動を地道に続けていけば，やがては地域学の教科書をつくることもできるであろう。

---

[17] 当初の予定では，１回の「予備日」を設けていた。ところが，半数以上もの受講生が教育実習に行くことがわかって，休講にせざるを得なかった。

「地域学総説」は本年度が１年目。われわれの挑戦はまだ始まったばかりである。

参考資料

〔資料１〕授業日程

１．オリエンテーション
　授業計画の紹介
〈第１部　パネルディスカッション：「地域を捉える視角とそこから見えてくる課題」〉
２．基調報告１　吉村伸夫
３．基調報告２　藤井　正
４．基調報告３　光多長温
５．基調報告４　野田邦弘
６．パネルディスカッションⅠ　司会　柳原邦光
７．パネルディスカッションⅡ　司会　柳原邦光
８．パネルディスカッションⅢ　司会　家中　茂
パネリスト：吉村伸夫，藤井　正，光多長温，野田邦弘，松本健治，渡部昭男，家中　茂
〈第２部　学生による地域調査実習報告〉
９．地域環境学科
10．地域政策学科
11．地域文化学科　地域教育学科
12．学生によるパネルディスカッション
　パネリスト：各学科からの代表２名，計８名

〔資料２〕基調報告の概要（「授業理解」筆者作成）

１．吉村伸夫教授　「今なぜ地域なのかー地域の文化的個性と『生の充実』ー」

regionとは，語源的には単なる空間の広がりではなく，政治支配の空間を指すが，こんにちでは，むしろ文化的なまとまりをいう。日本語の「地域」との違いは，前者がかなり広い空間を指しているのに対して，後者は狭く，「近隣関係」（人間が日常的に顔をあわせることのできる生活空間）を含む場合もあるという点である。しかし，いずれの場合も，エリア(area）と異なり，人間的なまとまりを前提にしているのであって，地域とは，人間の生活をトータルにみたときに現れてくるまとまりとその空間であるといえる。この意味で，文化が地域を考える重要な要素となる。

さらに，地域を人間が自然に働きかけて，様々な工夫を凝らして，生の充実を実現するための場と考えるとき，文化の重要性はいっそう高まる。何を生の充実とみるかは，まさに文化の問題だからである。生の理想が地域によっても時代によっても異なるように，それぞれの地域には歴史的に形成されてきた「文化的個性」が存在しているが，地域の人々がそれを客観的に認識することはきわめて困難である。というのも，「文化的個性」はノーム(norm）を含んでおり，自明なものとなっていて，検討の対象にさえならない場合があるからである。したがって，「文化的個性」と地域の人々自身の捉え方（地域の「文化的自己像」）との間には，不可避的にズレがある。生の充実のためには，まず「文化的個性」を的確に把握すること，次いで，「文化的自己像」との間のズレをできるだけ

埋めつつ，これを豊かにしてゆくこと，この二つが必要である。これが地域学の抱える文化的課題であり，これに応えるには学際的な知を動員しなければならない。

ところで，ノームのなかには基本的人権を脅かすものもある。アマルティア・センのいうように基本的人権が全人類に保障されなければならない（「人間の安全保障」）とするならば，文化 (culture) にくわえて文明 (civilisation）という視点が不可欠となる。ここでいう文明とは西欧文明であり，対等な個人による自己統治 (citizenship）や民主主義の概念，基本的人権を中核としている。人・モノ・情報の移動が激しいこんにちでは，さまざまな地域がこのような諸点への対応を迫られているが，見方を変えれば，これは地域がいかなる将来像を思い描くかという問題でもある。

地域はそのありかたについてたえず意思決定を求められているが，決定手続きの正当性もまた重要な問題のひとつである。たとえば，一人一票の多数決原理は西欧の生み出した民主主義の基本手続きであるが，これにもマイノリティ集団の構造的排除という深刻な問題が潜在している。このように考えるならば，西欧も含めてそれぞれの地域に存在するノームそれ自体を検討の対象とする研究 (normative studies）も，地域の生を豊かにするためには必要であろう。

２．藤井　正教授　「地域へのアプローチ― 地理学的な視点から ―」

地域が何らかのまとまり（あるいはシステム）をもつ空間を指しているのは確かであるが，どのような視点（あるいは目的）に立つかによって，地域の意味も，空間的な大きさも，変ってくる。たとえば，Regional Science は「地域学」あるいは「地域科学」と訳されるが，都市のメカニズムというように，一定の空間を機能的にみて，何らかの指標（例：人口，自動車数，排気ガス量）に基づいて，現実を数値化して理解しようとする。この方法は数値で表現されるため，都市計画を進める行政などに対して特に説得力をもつ。また，Area Studies（狭義）は，元々，アメリカ合衆国が世界戦略という特別な目的のために設定した空間に関する総合的研究であった。こんにちでは，農業技術・祭りといった生活を支える指標の共通性から世界観を共有する，国境を越えた空間に関する研究（高谷好一の「世界単位論」）を指すこともある。

地理学では，地域を二つの要素からなるものと考える。地形や気候などの「自然環境の要素」と畑・広場・商店・工場といった「人間活動の要素」である。A．ベルクは学位論文の研究対象として北海道を選んだフランス人研究者であるが，それはヨーロッパ的な気候の大地を，非ヨーロッパ的文化をもつ日本人が，アメリカの技術を使って開拓したという点に着目したからである。ベルクは自然と人間の関係のありようを「風土」と捉え，その形成過程を解明しようとしたのである。この「風土」を「地域」と置き換えることもできるだろう。すなわち，地域とは自然と人間が絡み合って生み出したひとつのシステムなのである。

しかしながら，この地域のまとまりも何を基準にしてみるかによって，次の３つに概念化することができる (Blotevogel)。「実質地域」と「認知地域」と「活動地域」である。「実質地域」は市街地や水田地域，あるいは通勤圏など，実際に存在するものの分布範囲や結合関係をもとに構成された空間である。「認知地域」はメンタルマップやイメージマップというように，住民の意識のなかにある主観的空間で，現実の地域と異なる場合もある。「活動地域」は，都市計画地域やエリアマーケティングという言葉がよく示しているように，現実の空間ではなく，何らかの働きかけをしようとするときに想起される空間である。

空間の規模という点から地域を考えると，実にさまざまな規模の地域を想定することになる。たとえば，環境問題には，ゴミの分別や車の利用方法のように個人で工夫できる部分と，車を利用し

なくても生活できるように都市規模で対策を講じなければならない部分とがある。こうしてゴミの焼却や車の排気ガスについて有効な対策を講じることができれば，他のさまざまな工夫とその集積によって地球規模での有効な温暖化対策となるかもしれない。つまり，何らかの問題を解決しようとするとき（何らかの現象を解明しようとするとき），われわれはそれに必要で有効な規模の空間を選択して考えているのである。

このようにわれわれの問題意識と選択によって地域の意味も空間的広がりも違ってくるのであるが，これからの地域づくりという観点にたったとき，これまでのように機能別にみるだけでは十分とはいえない。環境・経済・社会・文化など複合的な視点から「地域の文脈」（その地域に特徴的な上記のシステム）を捉えることが必要であろう。空間の大きさについても，最小単位である個人と最大規模である地球との間にある空間として地域を設定することができるが，この地域自体，さまざまな空間の重なりであるとみるべきである。また，時間を軸にして地域を捉えることも必要である。地域が問題になるのは，たとえば「良質な生活」を求めて，人間が働きかける対象だと考えられているからであるが，これまでの取り組み（たとえば箱物行政）が一定期間（建設期間）を過ぎれば，時間を顧みることがほとんどなかったのに対して，「地域の文脈」と「良質な生活」という視点に立った取り組みは，いわば「完成予想図のないプロジェクト」であって，絶えざる努力と工夫を必要とする社会的なプロセスとなるであろう。

３．光多長温教授　「地域を捉える視角と課題～経済と国土計画的アプローチ～」

この講義では，経済の観点から地域について考えるが，まず確認しておかねばならないのは，経済にとっては経済的合理性（高い収益を効率的にあげるための合理性）が考え方のベースになるということであって，地域もこれにかかわりつつ考慮される，ということである。立地条件を例に挙げていえば，原料や動力源を容易に入手できるか否か，安価で優れた労働力があるか，市場までの距離はどうか，といった意味で，地域が重要になるのである。もちろん，経済活動にとって好ましい地域は，活動の種類や内容によって変わるのであり，時代によっても異なる。たとえば，こんにちのような国際化時代になると，地域概念が拡大して，「アメリカ一国が一つの地域となる」とさえいわれるように，国内のさまざまな地域が視野から消えてしまうこともある。

しかしながら，一国の地域政策という観点からみるとき，経済活動がどこか特定の地域に偏って，地域間において住民の生活にあまりにも大きな格差（所得格差など）が生じることは，安定的発展を損なうもので，決して好ましい状況ではない。このような観点から，日本の国土計画は，その時々の経済社会の枠組み（フレーム）を前提としつつ，「あるべき国土構造」の実現を目指して格闘してきた。戦後でいえば，「均衡ある国土の発展」が政策目的であった。国土計画が考慮すべきは，決して経済合理性だけではないのである。

要するに，経済合理性のみを追求する自由主義経済の論理と「均衡ある国土の発展」を目指した国土計画の論理との間には，本来的に対立が存在していた。国土計画は経済活動にともなう歪みを是正しようとしたのであるが，結論的にいえば，経済の急激かつ複雑な構造変化に対して国土計画は徐々にその効果が限定的になったといえるであろう。

地域概念については，経済原理において，地域は第一義的な意味をもたない。極論すれば，経済合理性が優先すれば，どこでもいいのである。あるいは，地域の単位が大きくなりすぎると，人々の生活に密着した小さな地域は視野に入ってこない。国土計画の場合，「国土構造」という表現がよく示しているように，日本という地理的空間を高所から眺めてはじめてみえてくる，主として経

済的な空間（諸々の経済圏が織りなす構造）であり，計画策定者の目に映る，経済的に働きかけるべき構造である。そこに現れる地域は，必ずしも地理的・文化的一体性をもった地域ではない。とはいえ，経済原理と国土計画の関係を歴史的に振り返って，国土計画と地域の関係を辿れば，今日の地域政策が新局面に入って，新たな視点を獲得したということができる。

国土構造の変化を長期的に見ると，律令国家時代の畿内中心から始まって，江戸時代には，江戸集中を軸とした地方分散化社会と北前船による日本海流通文化経済圏が形成される（この時代は日本海側が表日本）。明治時代には，東京一極集中政策による太平洋側への中心の移動が始まり，それ以後，太平洋ベルト地帯が目覚しい発展を遂げる。その過程において，東京と大阪が中心的工業地帯となるが，地方の不満を受けて地方分散化型国土政策が推進され，「安定成長時代」には，地方と太平洋ベルト地帯との間の格差が縮まって，地方への定住が進むなど，地方がもっとも豊かな時代（「地方の時代」）を迎えた。しかし，サービス経済化・国際化時代の到来とともに，地方のみならず関西圏までもが衰退して，極度な東京一極集中が進んでこんにちに至っている。国土計画は「均衡ある発展」を目指してさまざまな政策を講じてきたが，サービス経済化，国際化時代においては，国土政策と地域政策とを一致させる方策を見出せなくなってきているのが現状であろう。

こうしたなか，地域政策は国土計画の受け皿であることをやめて，諸地域が自ら考案した振興策を国が支援する体制（「地域主体の地域再生」）に移行している。つまり，地域は，かつてのように「モデル定住圏」・「テクノポリス指定」・「リゾート振興計画」などの国土計画に基づいて地域振興に励むのではなく，自地域の資源を見直し，自ら立案・実行するのである。地域再生計画のなかには，オリーブや酒などを中心に再生を図るものもあれば，民話の活用を試みるところもある。つまり，いまや資源とは，経済的価値を有するものだけでなく，文化的なものも含むのである。地域再生において，文化に注目が集まっていることは，地域を考える際に留意すべき点である。

４．野田邦弘教授　「芸術･文化の創造性を活かした地域創造－創造都市論の立場から－」

講義の目的は，文化･芸術のもつ創造性によって「地域の再生＝創造」を実現するという観点から，地域課題の解決方法を考えることである。

なぜ今「地域」なのかというと，先進諸国において政策の重点が国家から「地域」（都市）に転換しつつあるからである。東西冷戦構造の終結とグローバル化にともない，国境の壁は低くなり，EU に典型的に見られるように，今や行政改革と地方分権の推進，「地域」（都市）間の連携・競争が課題となっている。日本の場合，特に国家の財政破綻ともいうべき危機的状況のために，行財政システムの改革と地方分権の推進が不可避である。

これからの日本の地域のあり方については，『地方分権 21 世紀ビジョン懇談会報告書（案）』が次の見解を示している。地域のありかたは，国の定めた画一的目標にしたがって決定されるべきではなく，地域の個性をふまえて，地域自らが判断し決定すべきである。それにはまず，地域が自由と責任をもって自立できるように，国と地域との関係を見直して，上下の関係から対等な関係に切り替えねばならない。地域では，「小さな政府」（自治体）のもと，住民の選択と監視を中心とした住民自治の実現が求められるが，それには，情報開示を徹底して，自治体の透明性を高める必要がある。

こうしたなかで，今日注目すべきは「創造都市論」である。「創造都市」とは，市民の創造性（新しい考え方や価値を創出する能力），とりわけ文化・芸術のそれを発揮して，新たな産業と経済的価値を生み出し，地域の課題を創造的に解決できる場である。なぜ文化・芸術なのか。創造都市研

究の第一人者であるチャールズ・ランドリーは，次の 4 点を挙げている。①今日では，「創造産業」が経済的に大きな可能性をもっている。②芸術文化は創造的アイディアを刺激し，都市問題の解決にも効果的である。③文化遺産や伝統は「都市の記憶」を喚起し，都市のアイデンティティを形成する。④芸術文化は都市の持続的発展に貢献する，である。なお，R. フロリダは，創造都市には「創造階級」（クリエイティヴな知的職業従事者）が重要で，彼らをひきつけるためには創造的環境と文化的寛容さが必要だという。

文化・芸術の創造性を生かした地域再生＝創造には，先行例がある。たとえば，衰退した工業都市で文化的資源は豊かでなくとも，ユニークな設計の現代美術館を衝撃的にオープンして，多数の来館者を集め，雇用を創出したビルバオ市（スペイン）。行政の強力なイニシアティヴと多額の文化予算とによって，歴史的・文化的資源を整備活用するとともに，市民の創造活動を中心に文化政策を展開して，フランスで最も住みやすい都市と評価されているナント市。インテリア・ファッション・工作機械など特定分野の産業集積と中小零細企業の水平的ネットワークによって経済的繁栄を達成しつつ，演劇協同組合と行政とが協同して芸術文化によって市民生活の質を高め，さらに「欧州文化都市」制度を利用して，多様なイベントを開催し，旧工場施設をアート・スペース化することによって，市民層のさらなる参加促進につとめたボローニャ市（イタリア），である。

日本では，横浜市の「クリエイティブコア」形成の試みがある。歴史的建造物･倉庫･空きオフィス等をアート・スペースに転用し，アーティストやクリエーターの集まる「創造界隈」にする。審査で選ばれた NPO が施設運営を担当して，現代アート中心にイベント等を開催し，「界隈」を創造的人材と創造産業の集積地にするという試みである。つまり，休眠状態の地域資源をクリエイティブな人々と産業の集まる「創造の場」に変え，芸術文化と市民の活力を起爆剤に経済を活性化しようというのである。

最後に，こうした観点から鳥取県の現状をみると，きわめて厳しいといわねばならないが，鳥取県高等教育機関「知の財産」活用推進事業として地域学部が本年度取り組んでいる「鳥取県におけるオルタナティブ・スペースを活用した文化創造拠点形成に向けた調査研究」の取り組みなどもあり，今後の成果が期待される。

〔資料３〕パネルディスカッションの進行

【第１回】

⑴　授業の補完

①　解題：柳原（5 分間）

②　渡部先生（地域教育学科）：地域と教育（10 分間）
　　松本先生（地域環境学科）：地域と環境（10 分間）

③　基調報告者等の補足説明
　　各報告者：5 分ずつ　（計 20 分間）

⑵　各回の学生の疑問に答える（30 分間）

・前回授業で提出された学生の疑問を整理して，事前にパネリストに送っておく。

⑶　次回予告：基調報告者に下記の共通の質問をすることを，授業で予め告げる。

[質問]「なぜ地域という視点から考えるのか。地域という視点を設定すると，何が見えるようになるのか。」

⑷　学生に質問を書いてもらう（10 分間）　記名式

・１回目の内容についての質問・意見を書く。また共通の質問について，考えていることがあれば，書いてもらう。

【第２回】

⑴　個別質問への回答（10 分間）

⑵「学生の質問・意見」から出てきた主な論点について，回答する。（20 分間）

　下記「質問・意見から見えてきた問題」のうち，次の２つについて回答・議論

「３．地域の個性・地域資源と地域づくり」と「４．地域と観光」

⑶「漫画を使った町の活性化」について野田先生の紹介（10 分間）

⑷　司会によるパネリストへの共通質問と議論（40 分間）

　「なぜ地域という視点から考えるのか。地域という視点を設定すると，何が見えるようになるのか。」必要に応じて，下記の「１．地域学とは何か」，「２．地域とは何か」も含む。

⑸　質問・意見を書く（10 分間）

　これから「第２回パネルディスカッションについての学生の質問・意見」を作成し，事前に学生に配布する。

【第３回】

⑴　質問への回答と議論（40 分）

・「第２回パネルディスカッションについての学生の質問・意見」からいくつかピックアップして，質問の趣旨を学生本人に説明してもらう。

・それに教員が回答し議論する。

⑵　討論「観光と地域づくり－長浜スクエアの評価－」（20 分）

⑶　下記の論点１，２について質疑応答（30 分）

【論点１】　なぜ「地域」なのか

質問：空間を区切るもの，区分するものとして，すでに都道府県や市町村といった行政区画がある。諸制度も行政も，さらには諸々の調査・研究でも，基本的にこの単位にしたがっている。こんにちが地方分権の時代であるとしても，自治体単位でいいのではないか。なぜ「地域」という視点が必要なのか。

【論点２】　なぜ「地域学」なのか

質問：既存のディシプリン（学術領域）うち，いずれかを学んで修得した知識をもって地域に取り組むのでは，不十分なのだろうか。「地域学」で学ぶべきもの，「地域学」でなければ身につけることができないものがあるのか。

⑷　パネルディスカッションについて感想・意見を書く。(10 分)

〔資料４〕第２回ディスカッション前に配布した「学生の質問と意見」の一部

３．地域の個性・地域資源と地域づくり

Q：伝統を含む地域の個性と今後の地域づくりとの関係は，どのように考えたらいいのだろうか。地域資源を発掘・発展させるべきか，それともまったく新たにつくりあげるのか。

〈実際の質問と回答〉

Q：地域資源とか，その地域の特色というものは，その土地に昔からある伝統的なものを発掘・発

展させるべきなのか，それとも新しくつくりあげるほうがよいのか。もし伝統的なものがぱっとしなかったり，ほとんどない状態の地域であれば，どうしたらいいのか。また伝統的なものが現在のニーズに合わない場合はどうか？

野田：必ずしも昔からある伝統的なものそのままでなくても良い。伝統は常に革新されなくては現代に生き延びないと思う。また，まったく縁もゆかりもないものでも，そこ（地域）から起こり，発展していくものならよいと思う。要は，市民の創造力＝想像力の発揮である。

藤井：地元のコンセンサスがあれば，新しいものでもいい。有名な地方都市再生の例の滋賀県の長浜のガラス，沖縄竹富島の赤瓦も，伝統ではない。こうした新しい文化を取り入れていく土壌（地域社会の）が必要だが。

家中：自分たちにとって「伝統」とはどんなものなのか。自分たちにとって守り育てていくこと，大切したいことは何かということについて地域住民が考えていくことが大切。そういう状態をどうつくっていくかが政策上の課題。

吉村：地域の個性の中でも，その地域の人々が自らの地域についてどういう像を描いているのかに，注目する必要があると思う。さらにその中でも，何がその地域の人々の生の質を保証しているのか（その際，充実感や安心感や安息感といった尺度のどれが重要かも，地域の文化的個性）に注目する必要がある。物質的充足や多様な出会いの機会だけが生の満足度を決める要因ならば，都会と田舎は「中央と地方」の関係にあって，両者間の勝負は，最初からついている。

だが，たとえば，現在の暮らしから何が欠ければ，やがて生活に空虚感を覚えることになるのかという問題を考えることは，自分にとって自明性をもつ尺度について考えることなので，じつは素朴には行えず，学問的な方法論が必要になる。

地域の文化資源を観光資源という面からだけ考えるのであれば，「伝承」でも「創出」でも，話題性と集客力を目指す企画の中で，その必然性に従えばよい。しかし，観光客は溢れたが人々の暮らしはむしろ空虚になった，あるいは荒廃した，では仕方がないのではないか。ＧＷに滋賀県の長浜に行ったが，狭いいわゆる黒壁地区にだけ，あるけないほどの人が溢れているが，そこから数分歩くと，ほとんど人に出会わない町が広がっている。出石にも似たような面がある。それでいいのだろうか。

４．地域と観光

Q：地域づくりと観光はどういう関係なのか。

〈実際の質問と回答〉

Q：地域づくりの最も基本となる要素に「住みやすさ」，「活力」，「誇り」とあったが，観光は「活力」に関わってくるのか。地元住民のための地域づくりと，住民以外の人々をターゲットにしたものとは違いがあるのか。地域づくりと観光はどういう関係なのか。

野田：大変いい質問だ。実はこのポイントはものすごく難しい。観光振興は地元住民の利害と対立することも多い。政策化段階では十分な配慮を要する。

光多：観光には（特に移動が困難な時代には）宗教的な交流を意味していた面もある。即ち，地域の資源を活用して人々が交流することによって，地域の人々と地域を訪れる人々がより良い人間になるという面がある。従って，ヨーロッパでは伝統的に観光が地域づくりの大きなコンセプトになっているケースが多い。

家中：経済的に収益をあげようとするとき，観光振興に期待する地域は多いだろう。そういう次元

とは別に，現代は，「生産をあげる」ということ自体が問い直されている時代といえるだろう。ハードのものをつくるより，ソフトのものをつくっている。さらに考えを展開すれば，モノそのものより，人と人を結ぶこと，すなわち「関係性」が追求されている時代ということもできる。

Q：地域課題の解決をはかるとき，何かを重視し何かを棄てなければならない場合がある。そのようなとき，どのような基準に基づいて，どのような方法で，判断・決定すべきか。

〈実際の質問と回答〉

Q：上記とほぼ同じ

吉村：結局は「何かを重視し何かを棄てなければならない」ので，その尺度が問題になる。鹿野町の祭りがよい例となるだろう。本家の祇園祭より古い形式を保存してきた祭りだが，観光資源化するかどうか，ずっと問題になっている。祭り中はどの家も開放され，誰が入って飲食しても良いが，これはじつは，町の人間しか祭りに参加しなかったから（鹿野町でも，城下町地区以外の人々は祭りに冷淡。そのことも知る必要がある）。開放してうまく宣伝すれば金にはなるだろうが，そうすると近代的な時間と空間が持ち込まれ，昔の日本の祭りの時間（進行表はないに等しい）も空間（無礼講空間）も，観光客の都合に合わせて消える。このことの意味を考えてほしい。

〔資料５「地域学総説」の感想〕

地域文化学科３年　井　七恵

地域学総説の授業は，全体を通して何を明らかにするための授業なのかがよくわかりませんでした。一回一回の授業を見れば，講義をされた先生方の専門分野を他学科の学生でも分かるように説明していただいたし，先生方のパネルディスカッションを聞いて学生の中で考えが深まり，学生のパネルディスカッションも行われました。毎回意見・感想を提出していたので，学生の意識が高まる様子は見て取れたのではないかな，と思います。

ですが，考えが深まったものの，学生には「何を考えたのだろう」という不安が残りました。地域学総説の授業で，何が明らかになるかは知らされていませんでしたし，半期の授業を終えてもテーマが分からなかったのです。学生の疑問点や意見からテーマを設定するのであれば，「地域学とは何か」がこの授業のテーマであったはずです。ですが，この問いに対してはっきりとした意見が述べられたことはありませんでした。「地域学とは，既存の縦割りの学問体系を横割りにして見てみるもの」「地域学はよくわからないが，地域というものについて考えるきっかけとなる」など，意見がありましたが，ぼんやりしていました。地域学が新しい学問で，はっきりした姿がないことは分かっています。しかし，実際学んでいる身としてそれでは不安ですし，自信を持って人に言えるようなものであってほしく思います。

今回授業を受けていて感じたのは，テーマ設定の曖昧さと，問いを投げかけて終わってしまったということです。テーマ設定は前述したとおり，主題が何だったのか分からずに授業が進んでしまったことです。問いを投げかけて終わってしまったというのは，先生方のパネルディスカッションにはあまり学生が入り込む余地がなく，聞いているだけになりがちでした。それに，学生のパネルディスカッションでこの授業が終了したのですが，本来ならばもう一時間，それを踏まえて講義があるべきだと思います。

地域学とは何か，というテーマを全体で考えるような授業にするべきではないでしょうか。

参考文献

下河辺淳『戦後国土計画への証言』（日本経済評論社，1994 年）
高谷好一『地域研究から自分学へ』（京都大学学術出版会，2006 年）
ダニエル・ピンク『ハイコンセプト』（三笠書房，2006 年）
田村明『まちづくりの実践』（岩波書店，1999 年）
チャールズ・ランドリー『創造的都市』（日本評論社，2003 年）
チャールズ・テイラー，エイミー・ガットマン他『マルチカルチュラリズム』（岩波書店，1996 年）
新崎盛暉・比嘉政夫・家中茂編『地域の自立　シマの力（上・下）』（コモンズ，2005 年，2006 年）
藤井信幸『地域開発の来歴－太平洋ベルト地帯構想の成立－』（日本経済評論社，2004 年）
渡部昭男・金山康博・小川正人編／志木教育政策研究会著（2006）『市民と創る教育改革－検証：志木市の教育政策』（日本標準）
渡部昭男・新井英靖編（2006）『自治体から創る特別支援教育』（クリエイツかもがわ）
現代農業 2001 年 5 月号増刊『地域から変わる日本－地元学とは何か』（農山漁村文化協会）
Harvey Armstrong & JimTaylor, Regional Economics & Policy, Blackwell Pub, 2000.

学科の調査報告書

鳥取大学教育地域科学部地域科学課程『平成 13 年度地域調査実習報告書』（2001）
鳥取大学教育地域科学部地域科学課程『平成 14 年度地域調査実習報告書』（2002）
鳥取大学教育地域科学部地域科学課程『平成 15 年度地域調査実習報告書』（2003）
鳥取大学教育地域科学部地域科学課程『平成 16 年度地域調査実習報告書』（2004）
鳥取大学教育地域科学部地域科学課程『平成 17 年度地域調査実習報告書』（2005）
鳥取大学地域学部地域環境学科『平成 18 年度地域環境調査実習報告書』（2006）
鳥取大学地域学部地域政策学科『地域調査実習報告書 1 －鳥取県湯梨浜町調査実習報告（1）－』（2006 年）
鳥取大学地域学部地域文化学科『2005 年度地域文化調査成果報告書』（2006 年）
田丸敏高（鳥取大学地域教育学科，「発達心理学特論」担当）『大学生の自己の発達』（2006 年）

（2007 年 1 月 15 日受付、2007 年 1 月 22 日受理）